

曾侯乙墓を訪ねて

鳴澤 成泰(中之島図書館)

はじめに

大阪府立中之島図書館は1904年に開館以来今年で103年目を迎える。現在は総合図書館の地位は大阪府立中央図書館に譲り、大阪資料・古典籍とビジネス支援に資源を集中してサービスを行っている。大阪資料・古典籍については図書館を作り上げてきた諸先輩あるいは様々な貴重な書籍類を寄贈・寄託いただいた多くの方々の力で築き上げられてきたコレクションをベースとし、ビジネス支援については所在地の立地とこれまで積み上げてきたサービスを磨き上げて進化させたものとなっている。草創期から多くの図書が寄贈されたこと、その分野も文学、歴史から科学技術、自然科学など幅広く収集され、利用されたことは創立100周年にあたり発行された『中之島百年—大阪府立図書館のあゆみ』に詳しい。創立前後に購入した図書であってもすでに100年を経過するという貴重なストックを持っているが、中でも貴重書として指定し、保存している和漢書は8500点にのぼる。これらの図書については整理し、まとまっていたものについてはその名を冠した文庫の目録として、漢籍については漢籍目録といった形で整理し、他の図書館や大学に配布し、利用できるようにしているが、コンピュータで検索できるようにする遡及入力についてはこれからの段階である。できるだけいろいろな人にその存在を知ってもらいたいということから特定のテーマのもとで展示会を行っているが、その膨大な量からしてなかなか日暮れて道遠しの感がある。この膨大なストックに目を向けてもらいもっと多くの研究者や興味を持つ人に見てもらいたいというのは中之島図書館に勤務するものの共通の願いである。

今回曾侯乙墓^{そうこういっぼ}の編鐘について何か書きたいと内部で話をしていたところ、貴重書の中に漢籍で編鐘を記載したものがあるとのことであった。本論に入る前にその内容を若干紹介しておきたい。

わが国においては青銅器として発掘されるのは古い時代のものとしては銅鐸、銅鏡、銅矛など種類に限られる。銅鐸はわが国で作られたもので楽器かとも言われているがその用途はあまりはっきりしていない。銅鏡、銅矛については邪馬台国論争で素材にとりあげられるが、良品は中国や朝鮮半島からもたらされたものであるとされており、古墳の副葬品

として出土する例が多いので、研究者の層も薄いと聞いている。これに対し、中国では膨大な量が発掘されているほか、伝世品として歴代朝廷の盛衰の中で政権の正当性を示す政治的なシンボルとして収集され、引き継がれて今日に残されているものも大量にある。中之島図書館は開館以来漢籍の収集に力を注いできたが、今回紹介する『至大重修宣和博古図録』は開館前の1904年1月10日受け入れで甲雑1 No.8654で登録されている全30巻の大判の漢籍である。木版刷りでその巻22から鐘の図とその解説の部分を示した。この本は田中治兵衛という人から150円で受け入れたという記録が残っている。現在中之島図書館所蔵の貴重本である『正平版論語』初刻本4冊が寄贈された際価格を問う館長の今井貫一に寄贈者の鹿田静七は言下に「金100円です」と答え、座中の人々の度肝を抜いたというエピソードが中之島百年の本の中に紹介されている。150円といえばそれをさらに上回るもので、金額的にも正に貴重なものであると言えよう。

『至大重修宣和博古図録』とは『図説中国印刷史』の記述によれば中国の元代の至大年間(1308~11)に杭州路で刊行された書物で、その元となったのは北宋時代に編纂された。

「宣和殿に収集されていた古銅器の図録。大観元年(1107)成り、宣和5年(1123)重修。『博古図』ともよばれる。宣和殿所蔵の銅器839件を20類に分け、類毎に、総説、銅器毎に、模写の図形・銘識・大小・容量・重さ等を考証記述する。金石学の古典的著述とされる。」

(『中国史籍解題辞典』) ものである。なお宣和殿は北宋時代の宮殿で北宋の首都開封にあ



『至大重修宣和博古図録』 第23編より

った。開封は現在では河南省東部の小さい都市となっている。黄河中流の南岸に位置し

ている。原本をご覧になりたい方についてはぜひ大阪資料・古典籍室に申し出ていただきたい。このへんで本題にもどることとする。

曾侯乙墓については、そこから出土したいくつもの音階の異なる鐘を何段にも並べ、宮廷での演奏に使われた編鐘が世界的に有名で、1992年には東京国立博物館で「曾侯乙墓出土文化財展」が開催され、1998年には東京国立博物館で「漆で描いた神秘の世界展」が開催されるなど、わが国にもその出土文物が紹介されている。インターネットで曾侯乙墓をグーグルにより検索すると648件。そのうち日本語の検索では552件であった（2007年3月16日検索）。今回、2006年12月全国埋蔵文化財法人連絡協議会の研修旅行に同行する機会を得、曾侯乙墓を訪れた。出土した文物を収蔵展示する湖北省博物館も訪れ、出土時の映像を記録したDVDや編鐘などの古楽器演奏を収録したCD、主な出土物の図録を購入した。現地で墓の跡を目の当たりにし、現物を博物館で見て、強い感動を覚えた。せっかくの資料なので、少し整理して紹介をしておきたくなった。軽い読み物として一読願えれば幸いである。なお資料については図書館に入れておいたので、興味ある方についてはご覧いただきたい。

曾侯乙墓の発掘現場

湖北省随州市にその現場は存在する。湖北省の省都武漢市からひたすら車で走る。高速道路が発達をして中国も交通の便が飛躍的に良くなったが、走ること3時間余り、インターチェンジからおりて地方の幹線道路に入り、随州市の市街地から北西部にある遺跡にむけバスは横道へ入る。典型的な田舎道。舗装も無くでこぼこ。現地のガイドは乗っているが、どうやら道を間違えたいらしい。そこでもう一度大きな通りに出る。すると分かりにくいところに曾侯乙墓の行き先表示の看板があった。そこから入っていく。やはり道は狭く、車のすれ違いもむづかしい。中国人民解放軍の野戦部隊教育部隊の表示があり、若い男女が教練の練習をしている。ちょっと場違いではと思っていると、門を開けて入れてくれた。実は曾侯乙墓はその基地の中にあるのである。その中に発掘現場があり、開けられた墓そのものを建物で覆い、遺物を建物の回廊などに展示をして博物館としている。しばらくするとたくさんの観光客がバスで来たので、これは観光地となっているのだと認識できた。写真撮影もOKということのでめずらしいところだと思ったが、よく聞いてみると遺物はすべてレプリカで本物は湖北省の博物館にあるという。

発見されたのは1977年の秋のことであった。その地に駐屯をしていた中国人民解放軍

が兵營の拡張工事をするときに葺き石に突き当たり遺跡であるらしいということがわかり、専門家の鑑定でそこには春秋戦国時代の君主の大型墓群があり、極めて重要なものである可能性が高いという結果が出た。そこで 1978 年 5 月、国家文物局の許可を得て、湖北省博物館が中心となり発掘調査を行った。DVD の字幕では次のように説明している。

「この墓は大型の岩坑堅穴木槨墓で深さは 13m あり、平面は不規則な多辺形を呈し方向は真南に向き東西の長さは 21m、南北の幅は 15.5m で総面積は 220 m²である。穴底には巨大な木槨が置かれ、槨の表面及び周りに木炭を充填して木炭層に青膏泥、黄褐土で覆われていた。そして槨の表面より厚さ 2.6m の固土層に石板が一面に敷かれていた。木槨は 171 本の巨大な長い角材で積み重ねた形で出来ている。槨室は東、中、西、北の 4 室に分かれ、規模の大きさはこれまでに発見されたわが国の同時代の墓の中でまれにしか見られないものである。東室には墓主の二重棺が置かれ、その側に陪葬棺が 8 基あり、殉犬棺 1 基並びに墓主が生前の武士の使った青銅戈も置かれ、その青銅戈には「曾侯乙之寢戈」という銘文が鑄こまれていた。西室には陪葬棺が 13 基置かれていた。鑑定によると主棺内の人物は 45 歳前後の男性で殉死者棺内人骨は 13 歳から 25 歳ぐらいの若い女子であった。中室には壮観な青銅の編鐘と石の編磬などの楽器が架上に架け並べられ九鼎八簋などの青銅礼器及び道具が南側に組を組んだ形か或いは層を成した形で配置されていた。ここは鳴鐘鼎食の正殿である。北室には、兵器、車馬具及び竹簡などが置かれていた。墓葬は「資厚き蔵多し器用いて人生が如き」であった。統計によるとこの墓から出土した文物は 10000 余点あり中に青銅礼器と道具など 134 点、車馬具兵器など 4700 余点、漆器 230 点、楽器 125 点、竹簡 240 枚、墨書篆字 6996 字あり、それに数多くの金器と玉器もある。著名な編鐘、尊盤及び九鼎八簋などが世界にも注目され、礼器、楽器、車馬兵器、生活道具、及び竹簡などあるべきものはすべてあると言える。青銅、金、玉、漆、木、麻、シルクなどありえないものはないと言える。これはわが国で東周考古における空前の大発見である。わが国では東周考古に関する発見された諸国のお墓は、数え切れないほど多いが、墓主の身分が判明し、年代も明確でクラスが高く、完璧に保存されたものが少ない。このお墓のような規模の大きい文物が多い、よく保存されて、そして科学的な発掘によって記録資料も完備されているのは実に有難いものである。わが国の東周考古特に諸侯墓葬制の研究に極めて典型的な実例を提供し、春秋戦国時代の墓葬の時代区分に新しい指標を出していたと言える。墓内から出土した器物の大多数は銘文が鑄こまれ、中に曾侯乙所用と記していた銘文は 208 箇所もある。この楚王罇鐘は楚の恵王が在位 56 年目に曾侯乙に贈った祭品

で、上に 31 字の銘文が鑄こまれ、紀元前 433 年に楚恵王が曾侯乙の逝去した訃報を得て、特別に作った罇鐘を曾国に送り曾侯乙を祭った事件を記載したのである。この罇鐘は墓主の身分判明及び墓の下葬年代を判明するために確実な依拠を提供した。この墓の下葬年代は戦国（紀元前 475～221 年）早期と鑑定され、今まで 2400 余年もある。

墓主の曾侯乙は戦国早期にある諸侯国の国君で、曾は国名、侯は爵位、乙は名字である。

曾国は随国である。周の時代にある諸侯国で姬という姓は王室と同姓である。一つの国はなぜ二つの名前があるのか、曾国は随国であるかと研究者達も疑問を持っていた。後の研究を経て文献の記載に随はあるが、曾は無い。ところが、出土した器物に鑄こまれた銘文に曾はあるが隋はない。そしてこの諸侯の領地は互いに一致していることが発見されたので曾国は随国であることを認められた。」

記述中東漢とは日本では前漢、西漢とは日本では後漢と称している。中国における表現は都が東から西への移動したことから名付けられている。

まるでタイムカプセルのよう

この遺跡のすごいところはまったく無傷で発掘されたところである。その理由はいくつか考えられる。普通古墳の例をみても墓の主体部に通じる羨道があるものだが、この場合は箱のように巨大な木材が穴の中に組み込まれ、そこに宮殿の様を移したような形で棺や器物が配置されている。そこに木を配置し、壁の木を組みその上で棺や器物を吊り下げて下ろしたらしい。それが証拠におろしたときにまっすぐに降りずに傾いたままになっている棺がある。巨大な二重棺であるため、修正はできなかったのであろう。そしてすべて入れてからふたのように巨大な木材が並べられ、その上に木炭層、青膏泥、黄褐土の層があり、塗りこめられたような形となっている。そしてその上に固い土の層を敷き、最後に進入を固く拒むかのように大きな石板が一面に敷き詰められていた。そして青銅器が錆びることなく美しく残されており、漆器や竹簡も良好な保存状態であったのは水で満たされていたためである。どうも築造してそう遠くない時期に地下水で満たされたようである。場所的にも丘の上にあるものの小山があるわけでもなく掘り込み式であるため墓泥棒の目にも留まらず、忘れ去られたものであろう。

墓には 13 基の陪葬棺が置かれていた。時代を遡ること殷の時代には生贄の時代があり、その残虐さに反発をして礼を重んじる周が出来たと言われている。その周も乱れ、世は戦国時代。礼は衣服、祭りのしきたりなどすべてにわたって厳しく規制されていたという。

この墓から最高の礼器として扱われている鼎が 9 基出てきている。9 基というのは天子のみが使える数であるとされ、身分的には数段落ちる侯でありながら 9 基埋納したということは戦国の世の乱れた秩序を如実に表すものであると言われる。そのような中で、経済力をつけた諸侯の王であるである曾侯乙は、この墓の中に自らの生前の生活があつてもそのまま続くことを願ったのであろう。墓内から出土した器物の大多数には銘文が鑄込まれ、中に「曾侯乙所用」と記していた銘文は 208 箇所もある。多くの金製品や玉製品に囲まれ、鼎などを使って食事し、編鐘などで音楽を聴いていたのであろう。その現実の姿がそのまま残されていた。現代的感覚からは無残などと思われる陪葬された女性達は楽器の演奏家や舞踊家であつたと考えられている。棺や編鐘の架台に赤い漆で描かれた模様は楽器を演奏している人の姿が模式的に示されている。その人数と陪葬者の数が一致するようである。

編鐘の一部が土中から出土した例は多いが、最も発達した形のフルセットが無傷のきわめてよい状態で出土したのは初めてのことであるという。さらにそれぞれの鐘には音に関する記述があつたが、そこに他の国の音の表記に相当する記述があつた。中国は広い。それぞれの地域で独自に発展した文化が一つの帝国として統一されていく前段階で、違う国で使われている音の表記に関する文化の対照表のようなものが作られていたのである。当時の記録手段である竹を削って文字を墨で書いた竹簡も多く出てきている。この竹簡はあわせて 240 本、墓の北室から出土し、兵器、皮甲冑など同一の場所に置かれていた。もともと縄で一連のものとして編まれていたらしいが、出土時には朽ちていてばらばらになっていた。長さは 72~75cm、幅 1cm くらいで編み繫いだものに墨で字が書かれていた。篆字は全部で 6696 字。筆跡は殆ど明晰に判別することが出来、字体は先に発見された戦国の楚簡（楚の国の竹簡）と同様のものではあつたが、それまで発見されたものと比べると最も時代が早く、竹簡の数も文字の数も一番多かつた。内容は葬儀に関する車、馬、兵器と各種の贈り物の内容を記録したものであるという。

紙は中国の偉大な発明である。後漢の蔡倫が西暦 105 年に発明したとされているが、前漢時代の遺跡から紙が発見されていることから、紙を改良したものであると言われている。いずれにしても戦国時代に紙はない。

古代の楽器はどのような音楽を奏でていたのだらうと、常々思っていた。正倉院御物のように奈良時代からの楽器など伝来のものが伝承していく過程で楽譜も書かれて受け継がれていくのか、むしろ口伝で伝承していくのか、ともかくも西洋音楽とはかなり違う面があるのだらうと思っていた。インターネットの検索で古楽器の楽譜を検索すると 1900

年に敦煌莫高窟から発掘された西暦 933 年以前の、唐代の音楽の楽譜が載っていた。ちょっとみたところ文章のようで、数字と記号が書かれている。どのように読むのかよくはわからないが、情報として紙に定着して残されたものが、古の音楽を再現させるのである。曾侯乙墓出土の楽器も、きつと綴られた竹簡に多くの楽曲が書かれていたに違いない。

現物の迫力はやはりすごい

翌日武漢市内の湖北省博物館で曾侯乙墓の出土品を一堂に集めた展示を見た。極めて精巧なつくりの青銅器や玉器を見つめていると、2400 年も前にどのようにしてそのようなものを作ることができたのか。不思議な思いにかられると同時に人間の力のすごさを思い知る。精巧に磨き上げられた玉器。穴も真円で硬い表面に精巧に彫刻されている。細い線がびっしりと掘り込まれているがそれがどのようにしてつくられたのか。多分石英砂を使って時間をかけて磨いたのだらうという説明があったが、現代でも容易なことでは出来ないようなすばらしいものだ。青銅器でも実に細かい彫りを蠟でかたどる失蠟法という方法で作られている。この方法は最近再現されたらしいが、現代の技術をもってしても非常に難しい高度な技術であるらしい。大きさも半端ではない。最大のものは青銅の酒器である大尊缶とよばれる甕のような入れ物で高さ 1.26m、胴の直径は 1m、重さ 327.5kg もある。ゆがみも無くすばらしいものだ。

私は 20 年ほど前、建て替え前の上海博物館で大きな青銅器をみて感銘を受けたことがある。それを上回るすばらしい青銅器が大量にフルセットで展示されているさまは、当時の繁栄を物語る。

各種の武器も同時に埋葬されていた。実用的な武器、その中には文献でのみ知られ、現物はわからなかったものがこの発掘結果から実物がわかったものがある。はらわたをえぐる笏という武器ということであったが、戦争に明け暮れるその様が思い浮かぶ。

たまたま同じ博物館の中に車馬坑（戦国時代の墓に付属して戦争に使われた馬車が埋葬されている穴）から切り取ってきた遺物群が展示されていた。高速道路を建設するに際していくつか存在した遺跡の中の一番外側で、つぶさなければならなくなった部分をもってきたということであった。現在も保存作業を継続中という話に驚くが、発掘途中の状態です。車馬が出ているものである。戦闘隊形になっていて中央に 6 頭立て、その両翼に 4 頭立て、さらにその外側に何列にもわたって 2 頭立ての馬車が並ぶ。同じく戦国時代のものでその当時に今の車輪と同じような構造の車輪が覗いている。人の乗る部分も出てきており、馬

車の両側にはきちんと横たわった馬の死骸。一体なぜそんな大軍団を死に行く王にささげたのか。国力の源である軍の勢力をそぐような行為をなぜ行ったのか。

王の死に際し、多くの家臣が殉死し、国力が現実落ちてしまったという話もある。それを反省して秦の兵馬俑坑のような形になったようだが、人間は権力の前に不思議な判断をするものである。

青銅器生産を支えた成熟社会

2400年前の日本はといえば、弥生時代の早期に相当する。その頃農業により富の蓄積が始まり、社会的な集団もできてきている。まだ土器を使用している時代で、青銅器が大陸から入ってくるのは弥生時代前期末の紀元前1～2世紀のこと。武器として導入されたと見られている。中国では稲作が始まったのは7000年前とされており、歴史の隔たりは大きい。

中国における青銅器の歴史はウィキペディアの青銅器の歴史の項によると紀元前2000年頃にはすでに使用されていたが、この曾侯乙墓の作られた戦国時代は質量ともに充実した時代である。当時原料となる銅や錫は採れる場所が限られているため、大規模に生産され流通していた。銅の採掘場としては同じ湖北省黄山市の南西25kmのところにある大冶県の銅緑山遺跡が有名である。大冶という名が示すように、現在も鉄鋼石や銅鉱石の採掘場として大規模な露天掘りの鉱山として運営されているが、そこに春秋時代、戦国時代から漢代までの坑道が発見されている。春秋時代の坑道は深さが20から30mで坑道の幅は60cm四方ぐらいと非常に狭い。まず縦坑を掘り、そこで鉱石を見つけると、その鉱脈を追って横に掘るという方法をとっていた。それが漢代の坑道になると深さが40から50mで坑道の幅は80cm四方となり、太い木で補強されるようになる。採掘場の近くには精錬をする窯の跡が多数残されている。木炭と鉱石を交互に入れ、ふいごで空気を入れ温度を上げて還元し、銅を引き出した。産物は粗銅として銅の塊の形として運搬したようである。実際に大冶湖という湖の水中から運搬時に落とされたものと見られる1.5gの丸い銅錠とよばれる銅塊が発見されている。船着場であったと推定される場所である。付近には鑄造された場所の形跡はなく、実際に作られる場所で合金作りと鑄造が行われたと考えられている。中国の広大な地に群雄が割拠し、争いを繰り返したが、その材料となる様々なものが大規模に流通した高度に発達した社会であったということだろう。

権威の象徴としての楽器

曾侯乙墓の価値は、何と云っても楽器であろう。権力の象徴であったとも言われるが、戦乱に明け暮れる戦国時代において、平和な時代の到来を希求したのであろうこの墓の主の思いを大切にしたい。最後に先に述べた部分との重複もあるが、曾侯乙墓文物珍賞の楽器の部分の解説文（程麗臻氏）から抜粋してその概要を説明しておこう。

「曾侯乙墓から出土した楽器には、鐘、磬、瑟、琴、笙、簫、篪の計八種、125 件があり、中国音楽史研究の上での貴重な資料となっている。

篪は、文献にもその記載がみられるもので、墓中から出土したのは 12 件、形は竹笛に似ている。篪の表面には五個の指穴と一つの吹口があり、音色は簫に比べ更に柔らかく、優雅である。此所より発見されたものは、これまで発見された最古のものである。

排簫は、墓中より 2 件出土し、ともに十三本の長さの不揃いな竹管を排列して出来ている。形は片翼形、出土時にもなお八種類の異なる音階を吹きならすことが出来た。

笙は、墓中より 6 件出土し、12 管、14 管、18 管の三種のものに分類出来る。笙笛内部の竹製の舌は大小様々であるが、精細に作られ、舌と本体との間には、間髪程の隙間しか無い。

五弦琴は、棒状の形態で、先秦の墓葬中には殆ど見られないものであり、琴身には人物、動物等の美しい模様が描かれている。学者の研究によって、これは編鐘を調律する音階標準器「均鐘」であることが分かった。

琴は、墓中から 12 件出土し、共に二十五弦のものである。瑟碼は 1358 枚、瑟身にはそれぞれ漆によって絵が描かれ。瑟尾には、透かし彫りの龍蛇の附飾がなされ、きわめて精美なものとなっている。

又、出土品には他に、建鼓、懸鼓、柄鼓があり、その中でも建鼓は現在まで発見された同種のものうち、最古のものであり、高さ 3.2 メートルの丸太に鼓腔があげられ、青銅製の鼓座の上に垂直に置かれている。

編磬は、あわせて 32 件の磬塊から成り、二段に分けて掛けられ、音域は三オクターブ、清明な音質である。磬架は二つの青銅製の首の長い怪獣を台座としている。」

ここで編磬とは石で出来ており、形はへの字型できれいに磨かれている。澄んだ音がする鉄琴のような感じの楽器である。

「曾侯乙墓の編鐘はあわせて 65 件、その内には、楚王の罇鐘一件が含まれる。出土時には、三層八組に分けられ、曲尺型の銅と木を組み合わせて作られた鐘架上に掛けられてい

た。上層の鈕鐘は 19 件、高澄な音質。中層の甬鐘は 33 件、主旋律を演奏するのに用いられ、下層の甬鐘は 12 件、伴奏に用いられる。出土された演奏用具は、装飾の施された 6 件の T 字形の木槌と、2 件の木棒である。鐘本体、鐘架掛け鉤には、象眼によって銘文 3755 字が書かれ、古代音楽研究の重要な資料となっている。編鐘の音域は広く、低音から高音まで編くカバーし、古今東西の楽曲を演奏することが出来る。曾侯乙墓の編鐘の突出した特徴は、「一鐘双音（一つの鐘から二つの音が出ること）」である。各鐘の正面部と側面部では、それぞれ三度音階が異なる音が出る。この双音は瓦を合わせた形の鐘体によって生み出されるもの、この「一鐘双音」は古代技術者の非常に大きな発明であると言える。

曾侯乙墓編鐘の工芸技術は極めて高く、先秦青銅鑄造技術の集大成である、渾鑄、分鑄等の技術、又装飾上では円彫（立体彫り）、浮彫（透かし彫り）、陰刻（掘り込み）等の技術が用いられている。

曾侯乙墓から出土した楽器は、その種類の広範さ、数量の多く、製作の精微さ、保存状態の良さから見て、中国考古史上、極めて稀なものであると言える。」

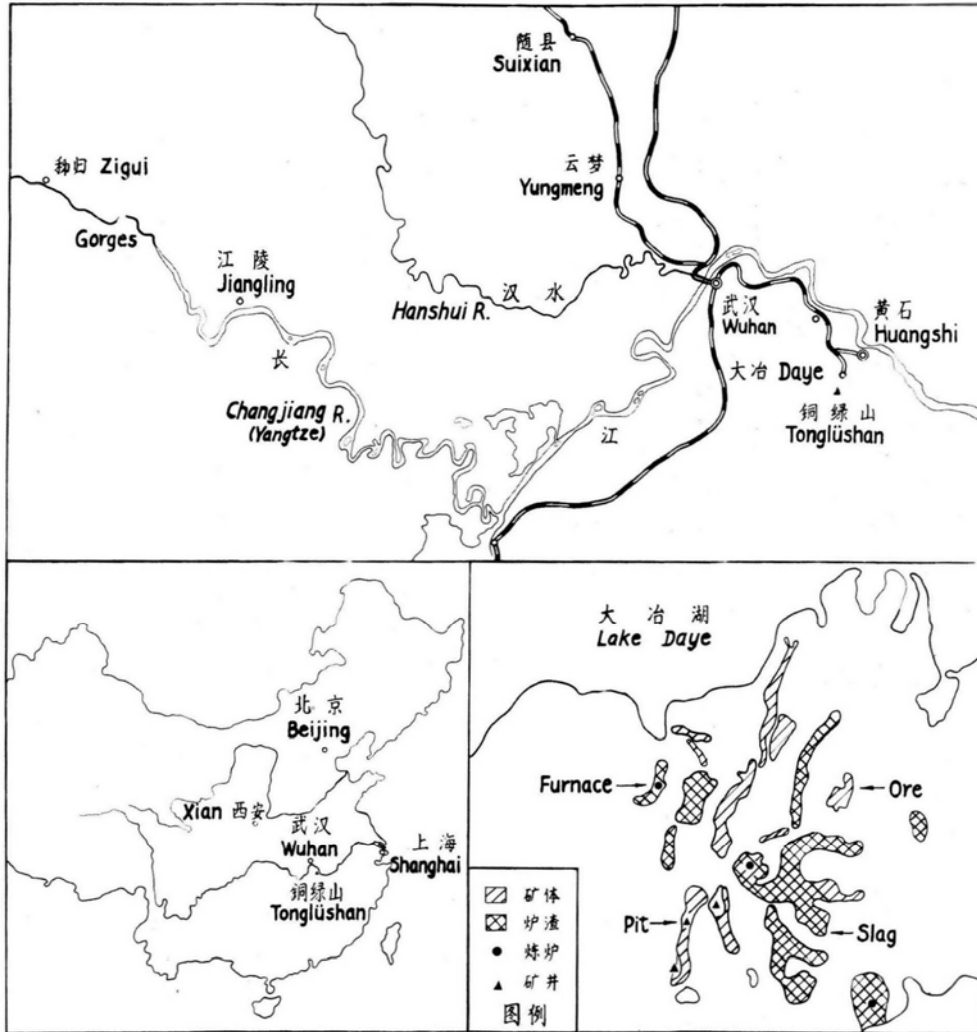
多くの墓の中から編鐘などは多く発見されているが、副葬品として埋葬されているため、朽ちてばらばらになっている場合が殆どで保存状態が良くない。この曾侯乙墓のように本の少し前まで演奏されていたように完全な形で見つかったものはない。復元された楽器の演奏を聴いていると現代の中国の騒々しい音楽とは正に隔世の感があるゆったりとした音楽で心休まる感じがする。はるか昔の人間が作り出した文字と音楽、そのすばらしい遺産に驚きを禁じえない。

参考資料

- 『至大重修宣和博古図録』 至大年間(1308～11)刊
- 『図説中国印刷史』 米山寅太郎著 汲古選書 40 汲古書院 2005
- 『中之島百年—大阪府立図書館のあゆみ』中之島百年—大阪府立図書館のあゆみ編集委員会編集 大阪府立中之島図書館百周年記念事業実行委員会 2004
- 『中国史籍解題辞典』神田信夫、山根幸夫共編 燎原書店 1989
- 『曾侯乙墓文物珍賞』湖北省博物館編 湖北美術出版社 1995
- 『銅緑山—中國古礦冶遺址』湖北省黄石市博物館、中国金属学会出版委員会、北京鋼鉄学院冶金史組 編 文物出版社 1980
- 『曾侯乙墓』(DVD) 湖北省博物館監制 九通電子音像出版社

『千古絶響』（CD） 湖北省博物館、中國唱片總公司録制 中國唱片總公司出版 1989
中華芸能部ホームページ <http://www.chugei.com/>

銅綠山遺跡の地理的位置図（出展：銅綠山－中國古礦冶遺



曾侯乙墓出土の編鐘（湖北省博物館）



車馬坑の切り取り展示・二頭立ての馬車と馬（湖北省博物館）



敦煌楽譜（中華芸能部ホームページから転載）

